

三つの重点的プロジェクトで描く近未来像 《住んでよし訪れてよし》の交流拠点のまち!

コロナ禍にも台風19号にも 負けず前進

栃木県の南西部、そして「日本列島のどま
ん中」(市内田沼地区)に位置する佐野市は、
平成17年2月、旧佐野市・旧安蘇郡田沼町・
同葛生町の1市2町の合併により、新生・佐
野市としての歩みをスタートした。今年2月
には合併から15周年の節目を迎えた。

平成30年度からは「第2次総合計画(平成30
年度〜令和11年度)」に基づくまちづくりが始
動。「第1次総合計画(平成19年度〜29年度)」
でリーディング・プロジェクトに掲げた《観
光立市》《スポーツ立市》のまちづくりに、《産
業・文化立市》のまちづくりを加え、合わせ
て3大リーディング・プロジェクトに位置付
けた。

平成17年の合併以来、新生・佐野市のこう
した歩みを一貫してけん引してきたのは、現

在4期目の岡部正英市長だ。

第1次総合計画では、合併後の市民の一体
感の醸成や、行財政改革を図りながら、近未
来のまちづくりに向け、目指すべき方向性を
明確にした。第2次総合計画では、「安定し
た仕事や新しい人の流れをつくり、移住・定
住につなげていきたい」(岡部市長の本年「年
頭所感」より)という狙いを持ちながら、地方
創生への取り組みの加速化を多角的に推進す
るとともに、交通利便性などを生かした交流
拠点都市の構築を図ってきた。

3期・4期目の市長選(平成25年4月、同
29年4月)において、岡部市長が連続無投票
という形で市民からの支持を受けてきたのも、
そうしたまちづくりが順調に進展してきたか
らこそその結果だろう。岡部市長はさらに4期
目の任期について、自らがけん引する佐野市
政の「仕上げの段階と捉えている」とも語る。

「中でも東北自動車道と北関東自動車道が
交差する交通便利性の強みを基盤に、本市が

おかべまさひで
岡部正英
佐野市長



目指す《交流拠点
都市》構築の要と位
置付けているのが、一つには平成
29年11月に完成したインランドポー
ト(内陸の港)の存在です。また昨年
から整備を開始した《出流原P.A.S
マートIC》が令和4年度には完成
予定で、3大リーディング・プロジェクト
および交流拠点の構築に一層の推進力が加



唐沢山城跡で開催された「全国山城サミット」の一場面(平成29年11月25日)

わたることが期待されます。そしてそこに至る前段階の追い風として、大いに待望していたのが、今年開催予定だった2020東京オリパラでした。

2020東京オリパラについては、かなりのインバウンド需要が見込まれるため、3大リーディング・プロジェクトはもちろん、特に交流拠点都市の構築の観点から、より一層の効果と進展を期待していました。ところが



佐野駅の北側に広がる佐野城跡(城山公園)

その矢先に、新型コロナウイルス感染症の全国的な感染拡大という事態を迎えてしまった。これはもう、全くの想定外でした(岡部市長)

新型コロナウイルス感染症の拡大防止には、人同士の接触機会の削減が欠かせない。4月16日に、「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」の対象区域が全国に拡大され、期間中は全国で不要不急の外出や移動の自粛など、国民の行動変容が求められた。そのために、佐野市でも観光振興などの面で大きな影響を受けたのは事実である。「でもここで脱力し、停滞しているわけにはいきません」と、



佐野市の交流拠点都市を目指すまちづくりについては、前述の交通利便性をフル活用し

ラーメン店開業希望者を対象にした移住施策

岡部市長は、その力を込める。

「昨年は台風19号の襲来で、本市は大きな被害を受けました。その復興についても、まだまだ途上なのです。そうした目の前の課題を一つ一つ克服するための努力を続けると同時に、新型コロナウイルス感染症への対処を適切に行っていきます。

さらに同感染症との共存を視野に入れた新生活習慣の浸透を市民の皆さまとともに図りつつ、『住んでよし訪れてよし』の交流拠点のまちづくり」という将来像の実現を目指して、私たちは常に前を向き、弛むことなく進んでいかなければなりません」と続ける。



ご当地グルメ・佐野らーめんは今やまちづくりの要の一つ



業や事業承継を併せて支援する移住促進プロジェクトだ。

「移住希望者にとって常に課題になるのは、移住先での仕事の確保です。それは佐野市が推進する一般的な移住・定住促進についても言えますが、この《佐野らーめん移住プロジェクト》に関しては、まずラーメン店を佐野市で経営するという目的を持つ人を対象にしています。そこが類例のないユニークさと自負しています(笑)。

た各種の施策・事業なども含め、話題性のある案件が目立つ。中でもひととき

希望者には個々の経験などに応じて、約半年から3年ほどにわたって、基礎研修および本格修業を佐野市内で実践していただきます。その過程をクリアできた方には、行政が

ユニークなのが、平成19年度から続く《クリケットによるまちづくり》と、今年始動した《佐野らーめん移住プロジェクト(4月)》および《佐藤さんゆかりの地聖地化プロジェクト(3月)》だ。

独立開業(あるいは事業承継)に関する各種手続きをサポートするとともに、オープンに至るまでのスタッフの確保や不動産問題、店舗の運営や資金の運用計画に至るまで、ワンストップで支援する仕組みになっています(岡部市長)

順番が後先になるが、まずは佐野市の代名詞ともいえるべき佐野らーめんを活用した《佐野らーめん移住プロジェクト》の概要からお伝えしたい。(※注「通常」ラーメンは片仮名表記されるが、《佐野らーめん》は「らーめん」を使用、本欄では状況に応じて両者を適宜、使い分けていく)

これは、佐野市への移住とラーメン店の創

このプロジェクトの背景には、移住希望者の移住先での仕事探しと、ラーメンの聖地としての佐野市における後継者育成および活性化という三つの課題を、無理なくマッチングさせる狙いがある。佐野市で開業したからといって、皆が皆、繁盛店になれるという保証はもろろんない。そこは本人の努力次第では



出流原弁財天の脇にある透明度抜群の湧水池

ある。だが一方で、ラーメンの世界的なブームの発生と定着により、ラーメン店開業を目指す人々は現在、外国人も含めかなり多く存在する。

同時に佐野市をはじめ、各地に点在する《ラーメンのまち》では、多数の店舗(佐野市は約150店)が共存し、そうした状況が観光資源として成り立っている確かな事実もある。同様のことは全国の《ギョーザのまち》《そばのまち》《うどんのまち》などにも言える。

同じ食のメニューを多店舗が工夫を凝らしつつ多様に個性を追求する状況は、今や地域を食のまちとして「聖地化」する大事な要素にもなっているのだ。

佐野市

市 政 報

(栃木県)



佐野市で行われたクリケットU19W杯・東アジア太平洋予選の表彰式

だから、それらのまちでは行政と業者が一体となり、後継者の育成や各種の振興策が図られている。しかし《佐野らーめん移住プロジェクト》のように、移住・定住施策と地元グルメの振興策、次世代育成を同時に推進しようとする施策は、恐らく類例がない。

「ただ、本来であれば、今年7月から予定されていた第1期生の基礎研修の開始が、新型コロナウイルス感染症の影響で延期になる可能性が高い」（岡部市長）のも事実だ。しかし、「たとえ、そうなるとしても、ラーメンのまち・佐野市として、この事業は必ず、全力で推進していきます」と岡部市長は続ける。

非常にユニークな事業であるため、新型コロナウイルス感染症の収束後は、盛り返しへの起爆剤となるのではないかと期待も膨らむ。

佐藤さんの心の故郷構築と クリケットのまち

佐野市は全国最多の約200万人が名乗る「佐藤姓」の発祥の地の一つという説がある。佐野の地は元々、平安時代に勃発した「平将門の乱」を治めたことで知られる武将・藤原秀郷（かじむねのひでと）が、下野国（現栃木県）の在庁官人（あちりょうしん）として赴任していた、父祖伝来のゆかりの地だ。そしてその一族はいつか「佐野の藤原氏」ということから、「佐藤」を名乗るようになったとされる。

佐野市では、この「佐藤姓発祥の地」佐野」説を基に、《佐藤さんゆかりの地聖地化プロジェクト》を今年の3月から始めた。佐野市を「佐藤姓ゆかりの地」として多彩な発信をすることにより、全国の「佐藤さん」に「心の故郷」として親しみを持ってもらい、関係人口の創出とネットワーク化を図ろうとする事業といえる。

佐野市では同プロジェクトを開始するのに先立ち、今年3月10日を語呂合わせで「佐藤の日」に制定。同時に「佐藤の会」を発足させた。今後はSNSなどによる発信からスタートし、さまざまなイベントの開催などを計画している。《佐野らーめん移住プロジェクト》



今も続く台風19号からの復興作業(秋山川)



昨年10月に襲来した台風19号は大きな被害を佐野市にもたらした



平安時代から続く天明錆物はあの藤原秀郷に由来

と同様、このプロジェクトもまた新型コロナウイルス感染症の収束を待つて、本格的な事業展開となる予定だ。

「参加者が具体的な事業計画に基づき、行政とともに夢の実現を目指す《佐野らーめん移住プロジェクト》とは対照的に、《佐藤さんゆかりの地聖地化プロジェクト》は、ネット時代にふさわしく、全国各地に点在する約200万人の佐藤さんを対象とする、実に遊び心満点の関係人口創出の試みです。それだけに、大きな話題を呼ぶことが予測されます。またSNSによる発信事業は、感染症の

状況に関わらず展開することが可能ですので、佐野市の情報発信の新たなメニューとしても大いに期待しております」(岡部市長)

今年から始動した全国的にも類例のない《佐野らーめん移住プロジェクト》《佐藤さんゆかりの地聖地化プロジェクト》の先輩格のプロジェクトである、《クリケットによるまちづくり》は、グローバルな可能性とスケールを感じさせる事業だ(こういったプロジェクトを地方創生事業として進めている自治体は全国唯一)。

クリケットは日本でこそ競技人口が少ないが、イギリス連邦(イギリスと旧イギリス植民地から独立した諸国から形成される緩やかな連合体)を中心に、世界100カ国以上で盛んに行われるメジャースポーツである。競技人口もサッカーに次いで多いとされる。先に触れたように佐野市における《クリケットによるまちづくり》は、平成19年から始まった。同年は「佐野市第1次総合計画」策定の年でもあるが、同計画のリーディング・プロジェクトの一つ《スポーツ立市》のまちづくりにおいても、クリケットは後に重要な位置を占めるようになった。

「佐野市とクリケットとの関係は、平成19年に日本クリケット協会佐野支部が設置され、平成22年に日本クリケット協会本部の事務局が佐野市に移転してきたことから始まりました。そしてクリケットは世界中で盛んに行われているのに、日本では非常にマイナーであることに加え、国際的な基準に合致した競技施設さえないということなども知りました。

そこで、このクリケットとの新たなご縁を生かし、《スポーツ立市》のまちづくりのメニューの一つとして、その振興に力を入れることは、市民スポーツの振興だけでなく国際化の事業としても有効であると考えました。私自身、学生時代は陸上競技に人生を懸けていましたから、スポーツを通じた人と人、国と国との絆の強さは十二分に知っています。実際、平成30年に市内にクリケット場を造り、国際大会を開催した際には各国から選手や関係者、観客が来てくれました。そういう意味では経済的にも、十分に見返りの計算できる事業なのです」(岡部市長)

多面的に進む交流拠点のまちづくり

そのような経緯で始まった佐野市の《クリケットによるまちづくり》は、市長の言葉にもある通り、グローバルな展開が実現しつつある。実質的には平成23年、佐野商工会議所を中心に《クリケットのまち佐野》サポータークラブが発足したことで弾みがついた。以

佐野市

市 政 ル ポ

(栃木県)



全国各地から参拝者が訪れる佐野厄よけ大師

後、クリケットの普及や指導、各方面への情報発信などの地道な努力を官民一体で重ねていったが、その成果は平成28年11月、佐野市で《第1回クリケット東アジアカップ》が開催され、日本代表が参加4カ国中2位に入ったことで、一気に花開いた。

さらに平成30年3月には、旧田沼高校跡地に国内唯一の国際規格を満たす広さと天然芝の国際クリケット場が造成され、9月にこけら落としのイベントと、日本代表対各国の選抜チームなどの試合が行われたことなどを通じて、《クリケットのまち・佐野市》はクリケットを愛する世界中の国々に「日本のクリケット

の聖地」として認識されるようになった。

「クリケットの大会を開きますと、近年、非常に増えている日本在住のムスリムの方たちを含め、さまざまな国の方々が佐野市を訪れてくださいます。特にイギリス連邦の国が多い南アジアでは、クリケットを国技としているケースも少なくありません。

そうした国々の方は、欧米のクリケットが盛んな国の方々と同様に、クリケットに理解の深い佐野市にとっても親しみを感じてくださるのです。そこで本市では《訪日ムスリムインバウンド推進事業》の計画を策定し、クリケットだけではなく、食習慣なども含めた、ムスリムの方たちが訪問しやすい環境を整えるべく、さまざまな準備を進めてきました。新型コロナウイルス感染症については先が見えない状況ですが、そうした努力の成果が一気に実を結び、花開いてくれる日を期待しております」(岡部市長)

佐野市にはまた、前述の佐藤姓のルーツ・藤原秀郷が平安時代に連れてきた鋳物師を起源とする《天明鋳物》の伝統が今も息づいている。藤原秀郷が居城にした山城で、全国山城サミットも開催された、国指定史跡の唐沢山城跡があり、佐野駅の北側には、秀郷の子孫が江戸時代初頭に築いた佐野城跡もある。佐野厄よけ大師には全国各地から参拝者が訪れる。

加えて現在の佐野市の象徴《佐野らーめん》やB級グルメ《いもフライ》、そして佐野の新



佐野ブランドキャラクター《さのまる》(平成25年グランプリ1位)

たな「まちの魅力」を発見・PRするため、地元のパパたちが試行錯誤して作り上げた新たな名物《佐野黒から揚げ》、さらに国際的人気スポーツの《クリケット》をはじめとした、佐野市の多様な話題を、日々情報発信している。これらの多くは新型コロナウイルス感染症対策が進められる中で、一時的に停滞を余儀なくされたが、収束への努力は国を挙げた態勢で続いている。

その先の近未来に、佐野市の多彩・多様なまちづくりの成果が、《交流拠点都市》の構築という形で実現される日の到来が今から楽しみである。

(取材・文：遠藤隆／取材日令和2年5月12日)